

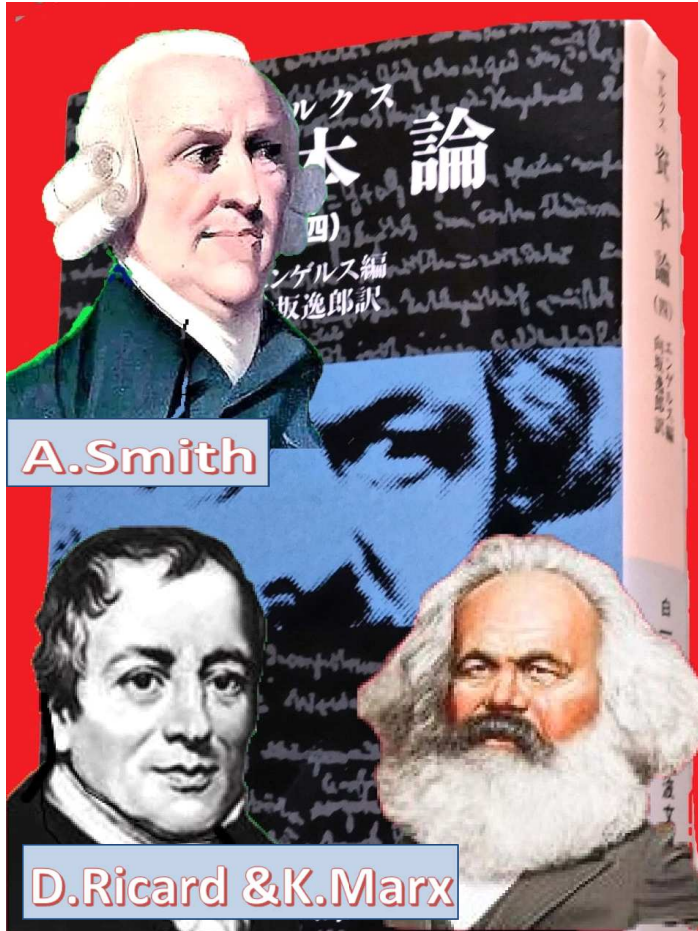
第85回「資本論を読む会」の案内

☆次回は-3月30日(火曜日)

午後6時30分からZoomで開催

第12章「労働期間」[岩波文庫(四)p336~p350]

DAS KAPITAL



第84回「資本論を読む会」は2月25日に開催しました。衆議院選挙の歴史的な大敗という結果のもとで、8名の参加で行われました。第10章「固定資本と流動資本に関する重農学派とアダム・スミス」に引き続く、リカードについての学習でした。スミスの段階までの、固定資本と流動資本の規定(混乱しているが)から、リカードは流動資本として原材料といっしょくたんにされていた労働に投下された流動資本を、分けて規定する。しかし、依然として労賃に投じられた資本部分が可変資本部分として規定されるまでには至らない。前貸し資本(固定資本と前貸し資本)の生産物に移転された価値の補填の仕方の違い、かつ他の流動資本と同様に扱われている。不変資本と可変資本の概念への発展には至らない。

またリカードは、不変資本の可変資本の比率を、固定資本に対する流動資本の比率と混同している。

固定資本と流動資本についての章・説は、スミス、リカードまでの利潤が両者から交換によって生じるという規定から、マルクスの生産過程での、労働から労働力、剰余価値の発生が説かれ、不変資本と可変

資本の概念が確率していく。そこに行きつくまで、マルクスは、スミス・リカードそして古典派経済学の限界(固定資本と流動資本の不変資本と可変資本との混同)を、何度もくどいほどに繰り返し例示している。

労働に投下された資本を他の流動資本と分離区別することが可変資本概念、労働力の規定としてきわめて重要であった。次回3月レポーターは、網走 sakai さんです。よろしく

終了後の懇親会は全国総会があったこともあり、Sugiさんから報告ももらって、アーだコーだと議論、その後はやはり総選挙総括などで賑わいました。「中道改革連合」の大敗と今後の方向をどう総括的に出せるのか-難しいですね。「様子見」も必要です。今回は10時半すぎに閉会としました。

「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.cocacn.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから- Kaiさん

◆古典派経済学では、価値移転が見えない。

*リカードは、固定資本と流動資本との区別を、種々の事業部門における等額の資本について両者の比率が価値法則に影響を及ぼすかぎりにおいて考察し、結果として、労働賃金の騰落がどの程度まで物価に影響を及ぼすかを考察しているにすぎない。

*彼は、固定資本と流動資本を、不変資本と可変資本と混同している。

■労働力は生産過程で単に価値を移転するのではなく、その支出によって価値を創造する。

・資本価値の流通から見ればあい、原材料の価値流通と同じものにされてしまう。したがって、固定資本と流動資本の区別では、剰余価値生産の本質を明らかにすることができないのである。

『資本の循環における、増殖される剰余価値の問題は、考慮の外におかれる』のである。